

## 第2章 黄金期 組織的部活動で日本バドミントン界の雄 年表

- 1951年 (昭和26年) 第1回全日本大学選手権 (団体戦) が、第2回全日本学生選手権 (個人戦) と併せて開催され、団体戦で初優勝、個人戦でも単複共に前年に続き優勝 (12月)
- 1952年 (昭和27年) 第2回全日本大学選手権、第3回全日本学生選手権で団体戦・個人戦単複共に優勝し、完全2連覇 (11月)  
関東大学リーグ戦、春秋共に優勝  
女子高校にバドミントン部創部
- 1953年 (昭和28年) 第1回慶早定期戦開催 (5月10日)
- 1954年 (昭和29年) 関東大学リーグ戦、春秋共に優勝  
第3回トマス杯 (世界国別対抗選手権) に日本が初参加、岡道明が日本代表主将として出場  
大学に女子部創設  
関東大学女子リーグ戦開始、春秋共に2位
- 1956年 (昭和31年) 関東大学女子リーグ戦 (秋季) で、女子部初優勝
- 1957年 (昭和32年) 第4回トマス杯、日本代表選手として越川啓が出場 (6月)
- 1958年 (昭和33年) 日吉記念館落成 (10月)



第2回全日本大学・第3回全日本学生選手権、  
団体2連覇個人単複3連覇達成の整チーム  
於神戸

## 概説

1950年(昭和25年)10月に整内対抗競技部新種目団体から正式な部として体育会に加盟したバドミントン部は、1951年(昭和26年)1952年(昭和27年)の全日本大学・学生選手権大会で団体・単・複の各部門で優勝して完全2連覇を達成、又関東大学リーグ戦では1951年(昭和26年)春には明治大に優勝をゆずったものの、その年の秋から1952年(昭和27年)の春秋と3連続優勝を果たし、輝かしい成績を収めた。

中でも特筆すべきは1952年(昭和27年)である。

前述の全日本大学・学生選手権大会、関東大学リーグ戦の他、全日本選手権大会では東京代表として出場した広田敏秀が単で、同じく東京代表として出場した広田敏秀・岡道明組が複で優勝、関東学生選手権大会では高見義和・岡道明組が複で優勝、第7回国民体育大会(宮城)では、広田敏秀・岡道明・吉原秀雄・藤井昂一の慶応勢で固めた神奈川が優勝し、出場した大会では、関東学生の単のみを除いて他は全部慶応勢が優勝し、正に慶応の黄金期であった。

その後大学の入試難は厳しくなる一方で、全日本トッポクラスの實力者は小数の入学しか実現せず、他大学の打倒慶応の標的となったが、この時代に台頭した立教大と覇を競い、全日本大学選手権大会では1953年(昭和28年)に3位となったものの、翌1954年(昭和29年)以降5年間2位を確保、関東大学リーグ戦では、1954年(昭和29年)に春秋2連続優勝の他、2・3・4位を確保した。個人戦では、広田敏秀・小宮淳宏・岡道明・吉原秀雄・藤井昂一・石田裕・越川啓が全日本選手権大会及び全日本学生選手権大会で単又は複のチャンピオンとなり、第2回と第3回のトラス杯(世界国別対抗戦)日本代表選手に岡道明・越川啓がそれぞれ選ばれた。

慶応定期戦は1953年(昭和28年)にはじまった。

当時早大はバドミントン部発足間もなくであり、関東大学リーグ戦に加盟して2年後で実力的には差があったが、体育会の他部との関係、バドミントンの普及、両校の親睦などの観点から定期戦を行うこととなった。第1回は大学男子のみであったが、5複10単の団体戦形式はそのときからの伝統で今日まで続いている。その後第2回から大学女子・OBが、第11回から高校男子が追加された。

大学女子は1954年(昭和29年)に創設された。直ちに関東大学女子リーグ戦に出場し2位、1956年(昭和31年)秋には優勝、1957年(昭和32年)には全日本大学選手権大会で男子と共に2位と好成績をあげた。

練習場の確保と費用の捻出が当時のマネージャーの悩みであった。毎日の練習は幼稚舎の体育館のコート2面を幼稚舎の授業の終る午後4時以降午後9時ごろまで借用し、女子高校、男子高校、大学男子、大学女子が曜日と時間を割り振って使用した。

一方費用の捻出は大変だった。先輩に寄付をお願いしOB会費を収集して歩いたが先輩の人数が少なく、また若いOBでは多額の寄付をお願いするわけにはいかない。貯まる一方のシヤトル代の支払いはいくらも待って貰い、年に1度ダンスパーテーターを開催してパーテーター券を売り、資金を集めて支払いに当てるのが恒例となったのは1951年(昭和26年)頃からである。(中村 尾関 記)

## 体育会加盟から半世紀

前田 鑑二 (昭和27年卒)

創部50周年お目出とうございます。[50周年記念誌]発行についてもお目出とうございます。その寄稿方ご依頼頂き恐縮しておりますがテーマとして「体育会加盟について」ご指摘されました。どうも極めて旧いことなので忘れてしまって……ムリして思い出せばあの当時奥井部長 (元塾長故人) から輝かしい戦績を残しているバドミントン部 (塾内競技部には入っていた) が体育会に加盟していないのはおかしいから学校の方は自分から石丸理事 (故人) などに働きかけるから君は幼稚舎からずーっと塾で顔も広いから体育会加盟の有力な運動部の実力者に推せん状をもらって欲しい旨依頼され、庭球部OBの田辺さん、空手部OBの仲井さんなど4~5名の方々のところに書類に署名してもらおうべく歩き回ったことなどが記憶されます。そして加盟が認められて奥井先性、森友先輩、藤井先輩から「ご苦労さん」とねぎらっていたことでした。3人の英国調の風がもう、物腰が当時、終戦後間がないこともあり、強く印象づけられ尊敬し、同時にバドミントンが愛したことにつながったと思います。それから何と4~50年過ぎたわけですよネ、その後このバドミントン部がどのように歩んできたか業界自体がどうだったか率直に云ってあまり関心がありません。バドミントンがスポーツの中でどのような位置を占めているのかもよく解りません。一見羽つきのでありながら実際には非常に過激なスポーツで体的にちよつと年をとるとついでゆけないような……私もすでに還暦を過ぎてスポーツについての重要性、とくに生涯スポーツの必要性を痛感している今日この頃ですが、どうでしょうか。バドミントンを高齢者、シニアでも楽しくできるような器具なり、方法など考えられないものでしょうか、ちよつと堅めの感じになりますか、ついでこの前、文部省OBの友人から聞いたことですが、平成元年、保健体育審議会から出された答申「21世紀に向けたスポーツ振興方策について」によりますとスポーツとは「個々人の心身の健全な発達に資する」ともに明るく豊かで活力に満ちた社会の形成に寄与するものである」とあります。最早「物の豊かさ」よりも「心の豊かさ」を、「衣・食・住」よりも「レジャー・余暇生活」を重視する生活意識・価値観・ライフスタイルへの転換が起きているとき、スポーツの生活における重要度は今後ますます高まっというものと思われませんか……こうしたなかで

の「バドミントンスポーツ」はどのように取り上げられてゆくのでしょうかネ？

## バドミントンよありがとう

広田 敏秀 (昭和28年卒)

小学生の頃である。初めて本格的なバドミントンを見た。ところは横浜のYMCA。例年盛大に行なわれていたスポーツの祭典で、父が演出を担当していた。フェンシング、デンスパーク体操、バスケットボール、ETC……。各界一流選手を招いての、エキジビションマッチがメインプログラム。KEIOの大先輩スポーツの父と言われた平沼亮三(後の横浜市長)も毎年必ず出席していた。亮三氏と父は、スポーツがとりもつご縁で特に親交が厚かった。満員の観衆をわかせていたゲームがある。それがバドミントン。そしてステージを色どるプレーヤーは佐藤、山本、森友、仲地、ETC……。父が手塩にかけてコーチをしていたKEIOBOYの面々である。とりわけ佐藤先輩が光っていた。俊敏、佳麗なシャトルさばきは実にお見事。幼い私の目には神業に映った。「佐藤は今、日本のナンバーワン、外国選手とやっても絶対勝てる！もつともつと強くなるぞー。」父が自慢げによく話していたことを憶えている。ああーこれが本物のバドミントンカーと思った。「敏チャン、大きくなったらKEIOにおいでよ」、大先輩に声をかけられて胸がときめいた。今にして思えばこの一言が私のバドミントン人生を方向づけたのである。戦前の事であった。

終戦一そして全国的に急速なテノポで拡がっていったバドミントン。父はライフワークとして、このスポーツに取り組み、普及とレベルアップに執念を持っていた。亮三氏の影響もあり、大のKEIOファンであった父はかつての教え子が全員無事、復員し再び元気でラケットを握った事を心から喜んでいった。「佐藤が帰ってきて北海道でガンバっている、森友が東京にいるナ、よしこれで大丈夫」一当時現役の選手は横浜YMCAでよく猛練習をしていた。六角、三橋、藤井、橋本、ETC、多士済々の豪華メンバーで、小生あこがれのKEIOBOY達であった。六角先輩から直接入学、入部の誘いを受け本当に嬉しかった。1も2もなくKEIOに決めたのである。幼なじみの仲良しである小宮敦宏がいた。彼とはまさに竹馬の友である。一緒にバドミントン、

やらないか？と誘ったのがキツカケで彼との親交はより深いものとなっていった。入部当初、勿論KEIOの全盛時代であり選手層は当時としては厚かった。六角先輩も、父の特訓を受け、初期のオール関東を制した名選手である。

新人の私を可愛がってくれた男がいた。藤井光男先輩である。

小宮と私は彼に大変お世話になっている。我が部初期のエースであり、フォームの美しさは天下一品。女性フアン人気の的であった。ガット張りの名人でもありその秘密を色々教わった。森友先輩の指示でダブルスを組み、3回にわたりタイトルを獲得している。繊細な神経の持主で技術問題では特にうるさい。時々議論もしたが、結論は2人共一緒だった。

組んでいて実に安定感のあるプレイヤーであり、ピンチをよく助けられた。協会の要請もあり、普及活動で全国行脚、地方巡業、コーチ等、積極的に参加し、バドミントンの発展に大変貢献している。我が部黄金時代の幕開けを飾ったスタープレイヤーであり功労者の一人として絶対に忘れてはならない名選手であった。

森友徳兵衛さんの話は山程ある。今は亡きKEIOの名監督、名コーチ、そして初期日本バドミントン協会の理事長であり、我が部の大功労者である。『チヨコ！(小生のニツクネーム)』いひか、お前はただひたすら勝つことに専念しろ、部内の雑務は一切おれにまかせておけ。猛練習をしろ！もつともつと強くなれ！“勝てば官軍”この言葉を忘れるなー。』とハッパをかけられた。蓋し名言である。社会人になってからこの文句は誠に有難く使いまくった。豊かな見識と巧みな話法の持主ですべて先輩のペースで事が運んでいた。多忙な社業を持ちながら、必ずコートサイドに陣取り、タイミンクよく適切な指示を与えてくれた人は残念ながらもういない。栄ある50周年を共に祝福出来ないうことは、本当に本当に、淋しいかぎりである。

「練習」。これは我々プレイヤーに課せられた十字架である。全員実によくハードトレーニングをした。ライバルを大巾に上回る練習の量と質、これは絶対必要なこと。スポーツのどの世界にも共通しているが、この点、当時の我がチームは自他ともにナンバーワンと認識している。始めの頃は、父の特訓を、小宮と一緒によく受けた。特に強調された点が2つある。1つは対戦相手の十分な研究とウイナークボイ

ントのサーチ、そして対策。2つめは、『耐えるべきは耐え忍び、チャレンジに猛攻せよ!』であった。勝負の鉄則であるのがわかっているけれども仲々むづかしく、体にしみ込んで実行できるまでに時間がかかった。この言葉はバドミントンの哲学として生きており、私の心を支え、バイエルとなっている。練習の成果はこの競技に必要な「アンテシペーション」の磨きに結びつくと思った。

年間を通じての公式戦は団体個人、単複、合わせて実に沢山あり、団体（リーグ戦）と個人（トーナメント）では戦法がスタミナ配分の問題もあり、かわってくる。特にトーナメントでは連日に亘り、15〜20試合の消化を要求され、強いスタミナが必要だった。

小宮と一緒に頑張ってとにかくよく走った。  
雨の日も風の日もー。

毎日毎日1時間以上は走り込んでいた。父から体の柔軟性を指摘されて、デンスワーク体操のレッスンを受けているうちに、バランス感覚がよくなった事に気付いた。チームの中でも、これを準備体操としてとり入れ成果を収めている。

打点をより高くより早く求めるこのスポーツで、ジャンプ力が課題のひとつになって来る。父が庭の片隅にハイジャンプのバーと砂場を作ってくれた。お嬢で晩年、かなり納得のゆくハイジャンプ・スラッシュが出来るようになった。練習コートが少ない時代で苦勞をした。特にマネジャーの苦勞は大変だったと思う。当時は天現寺の幼稚舎体育館、週2〜3回のペースの練習。残念ながらポリウムが全然足りない。毎日練習する必要があった。不足した分の大半を父の計らいでYMCAに求めた。藤井、前田、小宮兄弟、イスマイエル、そして在京現役メンバ―もコートを求めて横浜に集まり、よく練習をした。

“365日のサーチ”である天現寺コートの至近距離に前田の家があり、練習の帰りによくみんなで押しかけた。

『あーら皆さんいらつしやい。今日は何人さん?』気さくな感じで迎え入れてくれた彼のおふくろさんが懐かしい。度々御馳走になったが、前田家はこの頃、我々チームのレストハウスの存在になっていて、色々お世話になり恩恵にあずかったメンバ―は他にも沢山いた。ハーフトレーニングが終って共に過ごした、楽しい思い出のひとつである。

関東選手権大会で始めて、外人選手と対戦した。『イスマイエル』である。小柄ながら実に柔軟な体。そして巧みなフエイントとネット

プレーに幻惑されて苦戦をした。藤井先輩の熱心な勧誘がきいて当時留学生であった彼は、この試合後、我がチームのレギュラーメンバーに加わった。素晴らしい仲間が入って来たものだ。彼は『バドミントンの虫』である。国技として伝統を誇るインドネシアで活躍していた男で、我々にはなかった多くの技術を与えてくれた。横浜YMCAのメンバーになった彼からラケットラケットで特にネットプレーとフエイントを教わった。とりわけダゲルスのフオーメーションには、造詣が深く、片言の日本語と英語で、当時日本にない、こまかいテクニクを身振り手振りで、情熱的なコーチを小宮と一緒に受けた。

彼のお蔭で、私のバドミントンは、このあと大巾に変わって来た。イスマイエルには特に感謝をしている。東中野の留学生宿舎に何回か招待された。現地王様の息子であった彼は、アメ車を乗り廻し、裕福な生活をしていた。リーグ戦のKEIOベンチは彼の差入れによる、おいしいサンドイッチ、ジュース、コーラでにぎわっていた。食糧難で空腹の時代。我々は彼の好意に甘んじて色々な恩恵にあずかっている。対戦相手となった他校、ベンチ選手諸君のウラメシそうな顔が印象に残っている。

無慮、3年間にわたり、親友の小宮とダゲルスを組んだが、気心を知りつくした彼とのコンビはお互いにウラメシがピツタリ合っていて、技術以前の呼吸が我々を支配していた。

ダゲルスは心のゲームと感じたのはこの時である。彼はクールでクレバーなプレーヤーであった。相手を見る目が実にしつかりしていた。ドロップショットと絶妙なタッチのネットプレーは一級品。イスマイエルのコーチを得てコンビネーションは短期間に大巾、レベルUPをした。お互いに励まし合って、日本タイトルをとったときの嬉しさ！遂にやった！2人でひそかに祝杯をかたむけたあのビールの旨さは今でも忘れられない。—



第5回全日本選手権単複優勝  
第3回全日本学生選手権大会単複  
3年連続優勝当時の筆者

合宿は毎年、場所を変えて行なわれていたが、脳裏に焼きついているのが、何といても、諏訪である。真夏の炎天下連日、ハードなラソンの強烈プロگرامが待っていた。

この時、なぜか森友先輩は不参加、合宿総監督として諸岡先輩が表れたのである。眼光ケイケイ。気迫あふれる彼の風貌には勇名を馳せ

た石垣島、鬼隊長のにおいか残っていた。

ものすごい特訓で、全員クタクター。夜はビールを飲む元気もなく、死んだように眠りこけた。先輩は桑のムチを持っていて、全軍をしつたげきれいしていた。

『助けてくれー！この調子じゃ、最後まで持たネーヨー！殺されちゃうゾー。』死にそうな声で訴える仲間も何人かいた。

あたりは沼地で蚊の大軍が宿舎におしよせて、トイレには撃退用のうちわがおいてあった。

幸い一人の落伍者も出ずに終って、ホットしたが、このマラソンのお蔭で秋のリーグ戦は全員好調。他校に楽勝している。まさに愛のムチのお蔭であった。鬼隊長を派遣した森友監督の奥の手。と我々はこの時悟った。苦しかったが楽しい合宿だった。亡き諸岡先輩の気遣いは敬意を表する次第である。

奥井先生が我が部の部長になる話を聞いて驚いた。あの高名な大先生が？と全員耳を疑ったが本当だった。飾り気のない実に人の良いおじさんだった。就任後、しばしば時間をさいて試合の応援に来てくれた。神戸の全日本学生には、初日からラストまで、コートサイドに座っていた。優勝した時かけよって来て、ゴクローサン、ゴクローサンと全員に握手をしてくれたのである。優しいおやじのハートにおれ、暖かさに感激して胸にジンと来た。

その夜大先生のおごりで我々全員、おいしい神戸ステーキを御馳走になり、先生と肩を組んで若き血の大合唱をした。後の塾長に応援を頂いた誠に有難くも恐れ多いお話である。

昭和26年、秋の全日本学生選手権大会。今にして思えばKEIOの全盛時代で私も絶好調だった。神田の国民体育館で行なわれていたが、決勝の当日、大変なさわぎがおこった。当時進駐軍の大ボス、リッツウエイ中將が突然会場にやって来たのである。大のバドミントン好きとの由。協会役員席はテノンテコ舞いで、まさに殿様のお成りーという感じである。貴賓席には中將が引き連れてきた偉そうな将校がずらりと並び、会場や入口にはMPがうようよしていて、一種異様なムードで試合が始まる。

『チヨコ、絶対に手抜きするな！自分に挑戦しろ！』

森友監督のゲキがとんだ。15-1、15-0で決着がついた。絶好調だった。相手には誠に申しわけないが、自分としてはこの時、完ペキな試合展





リッジウェイ中將夫妻  
第2回全日本学生選手権を観戦し  
入賞者を祝福

開をしたと思っっている。表彰式の後山田会長（東京都知事）から中將を紹介されたが、隣にピッチャリ寄り添って奥さんが居た。ハリウッドから抜け出てきたような凄美美人で、特に脚がきれいだっただ。ミンクのコート、強烈なシヤネルの香りを憶えている。あのリッジウェイのワイフと握手したのは「チヨコ」と俺だけだよなー。その後学連の委員長になった三枝がよくする話の一つである。

思い出に残る勝負は？と聞かれると、それは何といっても佐藤先輩との試合である。

過去2度対戦して大激戦を演じている。あれは昭和25年秋の国体決勝。当時はオープン種目で、文字通り全日本選手権であった。

忘れられないこの試合は東京YMCAが舞台となった。此の試合に限り、どこを血迷ったのか協会は何と準決勝以上、前代未聞の5セットマッチを採用したのである。佐藤選手は前年チャンピオンの岡淳一選手と対戦、2時間の大熱戦の末、この強敵を倒して決勝に臨んできた。コートサイドでは森友監督が私と先輩を呼んで声をかけた。

『今日は俺、本当に困っちゃうよなー、両方共勝たせてやりたいよー、佐藤はチヨコをやっつける。チヨコは佐藤の胸をかりろ！』

この日に限って森友先輩は無責任な物云いをした。実に実に苦しい長い長い戦いであった。死力を盡くした戦い……とは後にも先にもこの試合だけ。自信を持ってくり出す私の球を大先輩はいとも軽々とさばき、強烈なショットを送り込んできた。ものすごかった佐藤先輩の切れ味と体力におしまくられた。球筋も非常に読みにくくて、その強さにはまったくおそれ入った。2時間半に及んでこの試合では、途中異例のDr.ストップ。20分間の休憩がとられている。現役時代対戦した相手としてのもっとも手強かった選手である。

僅差で決着がついたとき、先輩は優しい兄貴に変わっていた。「オーイ敏ちゃん、強くなったなア、お目出とう！大きな体にガッチリ握きしめられた時思わず、目頭があつくなった。

“あこがれの君”佐藤選手との戦いー。未だに時々、この試合の夢をみる事がある。先輩もきつときつと夢を見てくれているだろうーと思いやらー。一生涯忘れることの出来ない戦いであった。

この試合限りでそれ以後、協会は5セットマッチを禁止している。この苦しさを知っているのは4人（準決勝以上、佐藤保、藤井光男、

岡淳一、広田敏秀)のプレーヤーだけだ。

我がチームの黄金時代は続いたが、他校も打倒KEIOを狙い、虎視眈眈としていた。

立教のレベルUPが目立ち、明治、法政にも優れたプレーヤーが沢山いた。森友監督が次の時代に備えて、補強対策を練っていた。

『チヨコ、そろそろお前の後継ぎを探してこい!』と云われたのはこの頃の事である。横浜YMCAのコートにはバドミントンの名門、関東学院の選手が数多くあらわれる様になっていた。『先輩!一本練習をつけて下さい!』と頼まれてよく相手をした選手がいる。

岡道明君だった。名声高き岡淳一氏の実弟である。荒けづりだったが彼の素晴らしい素質にホレ込んだ。彼が我がチームを志願してくれてKEIOの層は一段と厚くなった。岡、藤井(昂)、吉原、江井等の有望新人が大量に入学してきたのである。『チヨコに弟を預けるからナ、よろしく頼むよ!』と岡淳一氏に云われた。道明君とは晩年の約1年に亘りザルスのコンビを組んでAll Japan,とAll Japan学生タイトルを獲っている。猛練習で彼の腕はメキメキ上達していった。兄ゆずりのスマッシュは、破壊的な威力があり、彼の放ったノータッチエースは数知れない。若干くせがあり、トーナメントの緒戦、立上りは調子が出ないで苦戦するが、決勝ラウンドが近づき、ギヤラリーが多くなるにつれて、完ペキに仕上がっていた。もともと良い点は試合への取組姿勢。勝負に対する執念はきわめて旺盛であった。俺達の良い後継ぎが見つかって、本当に良かったと思った。道明君は全盛時代あの「トマス杯」に出場し、大活躍を演じている。私の果せなかつた夢をのせてー。

学窓の最後の年にスポーツ功労賞を体育会から頂戴した。そして塾長からレギュラー全員に特別会食の御招待をうけている。KEIOの名声を著しく高揚したというおほほめのお言葉であった。

全く恵まれた環境で思う存分好きな事をしながら評価されておれはなんて幸せ者なんだろうーと思った。27年の春宿敵の偉大なチャンピオン、全日本の岡淳一選手を取ったとき、国内に敵がいなくなり、目標がなくなった。

世界との交流を夢見ていたが実現出来なかつた。アメリカに天才、Dr.フリーマンが居りマレーにプロチャンピオンのウーペンソンがいる。イスラエルからもウーペンソンの情報を聞かされて、早く何とか一戦お手合わせ出来ないものかと真剣に考えたのはこの時代である。

プロでは当時の日本状況下、生きていけない事を悟り、社会人の道を選んだが世界チャンピオンと対戦できなかったことが唯一の心残りであった。

昭和28年に過去の実績が評価されて、夢に見た日本スポーツ賞を戴いて、色々とサポートして頂いた方々とKEIOのお蔭であり、光栄の至りである。同時受賞者に、レスリング、オリンピックの石井、テニスの隅丸、柔道の吉松6段、スキーマの猪谷等が並んでいた。平沼亮三が祝福してくれた。

バドミントン、生命。で生きていた父の嬉しそうな笑顔が目に入った。その時『俺もこれで一寸ばかり親孝行が出来たかな？』と思いい、ホッとした。

『若き血に燃ゆる者、光輝みてる我等、希望の明星仰ぎてここに、勝利に進む我が力、常に新し、見よ精銳の集うところ烈日の意気高らかに、さえざる雲なきをー。』

何時唄っても実に気持ちの良い我等の唄である。団体戦優勝の都度、チームメート全員でスクラムを組み乍ら絶唱したこの唄ー。唄い乍ら思うー。この唄。若しかしたら、俺達の為に作られたのではなからうか？ーと。そしてお互い次の試合の健闘を誓い合ったものである。ラケットによってふれ合った人生。同志の堅い結束、合宿、試合、Party、練習、ETC…を通して生まれた友情と懐かしい思い出の数々は語り出せば枚挙にいとまなし。

ーああー、我が青春に悔いなしー。

50年ひとむかしー。まさに今昔の感あり。そして昔の仲間とスクラムを組み、声高らかに再び若き血を唄い度い！

バドミントン人生ー、KeioBadminton部万歳！そしてさびしく思う。昔の光今いざぞ！願わくば再び我が母校に栄光の旗よみがえる事をー衷心より折り念じて、ペンをおく。

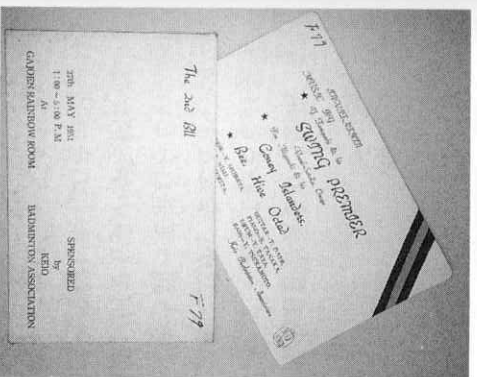
ーバドミントンよ どうも有難うー

---

## ダンスパーティー

広田 敏秀 (昭和28年卒)

世の中はダンスパーティー華やかなりし頃であった。当部のマナージャーは良い腕をしていて毎年2～3回恒例行事として実施していた。我々はこれを俗称『ダンスパーティー』と言う。



当部主催第2回ダンスパーティー  
(1961.5.27 目黒雅叙園レインホ  
ール)の入場券

目的が2つあった。1つは部費かせぎである。体育会新入りの我が部の予算は他部とは較べものにならない程少なかった。自分達でかせごうという訳である。もう1つは激戦の試合、ご苦労様というチーム内の親睦と内外のPR活動が其の狙いである。ジャズ、ウエスタンの全盛で、誠に楽しい、良き時代であった。バツキー白片とアロハハワイアンズ、大橋節夫とハニーアイランダーズ、ボス宮崎とユニークアイランダーズ、ジョージ川口とビツク4、鈴木章ことリスムエース、etc...、一流どころが出演。ボーカルは笈田敏夫、テイーズ釜苺、黒田美治、ナンシー梅木、ベギー葉山、新倉美子etc、一世を風びしたメンバークが唄っていた。うちのダンパーは大変な人気である。永楽、サンケイホール、高輪グリンス、雅叙園等のホールが会場となり、何時も超満員。

大人止止めとなってホールを眺め乍ら『ヨシ！今回もいただき！』でネージャーの永川がヒクヒクしていたことを想い出す。試合の合間をぬって全員参加、愉快なひとときであった。ダンパーの影響だろうか？知らないうちにジャズとハワイアンが体にしみこんで、大好きな音楽となってしまった。小宮と前田が家でウクレレを弾いていた。彼等の手ほどきをうけて、お蔭様で人生の楽しみが又一つ増えた事を喜んでいる。

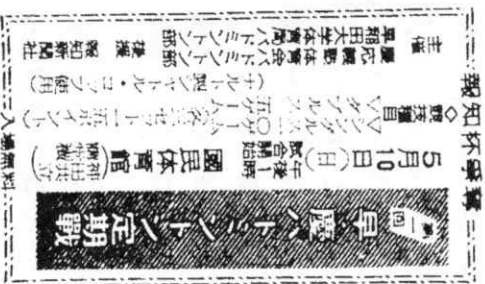
数年前のことである。名古屋出張の帰途、新幹線で隣りに偶然、大橋節夫が座っていた。

通称オツパチである。あまりのなつかしさに思わず声をかけたら、気安く応じてくれて2時間素晴らしいハワイアン談義を拝聴した。

昔は“なんてキザな野郎”と思っていたが大ちがよい。それ以来熱烈な彼のファンになった。大昔、大橋先輩にはKeioBadmintonのパーティーで大変お世話になったと話したところ、喜んでくれた。もらった名刺には「日本音楽放送協会理事」となっていて目下東京芝所属とある。オツパチは現在齢68才。「幸せはここに」 「ズボンの折り目」 「グッドバイホテル」 etc オリジナルの作詞作曲は150曲余と聞く。ハートのある彼の唄はまさにハワイアンの演歌とでも云うべきであろうか？今年で芸能生活50周年を迎えた。いみじくも我が部と同じである。パリスホテルのリサイタルに先日行ってみた。楽屋を訪ねたら私のことを覚えていて嬉しかった。一緒に撮った記念写真は大切に飾ってある。それにしても彼の若さとバイオリナーは、本当におどろきである。 オツパチよ！ガンバレ！

## 慶早定期戦はじまる

三枝 欣一 (昭和29年卒)



慶早定期戦開催を告げる  
1953年5月7日の朝知新聞

創部50周年の記念行事の1つである部史編纂委員より“標題”につき何か思い出を書けという依頼を受けた。よく聞いてみると、本件については当時現役だった2・3のOBに頼んだが、なんとか、かんとか理由をつけられ、結局牙先が私のところへ回って来たらしい。面倒クサガリ屋の私に全く迷惑なことである。何でも良いから何か書け、ということなら、前回、40周年記念のとき投稿したものをコピーしてそのまま渡せばいい位に思っていたのに、“慶早……云々”と命題されてはゴマカすわけにもいかずやむなく思い出してみることにする。先づ何故私のところに牙先が回ってきたか種明しをしよう。第1回大会の記録をご覧いただければすぐお判りいただけると思うが、14:1と我が塾が大勝しているが、このたったの1敗が、何を隠そう私の1敗である。当時、マネジャーとして辣腕を奮った磯見君と私のダブルスである。当時のマネジャーの仕事は、練習場の確保、試合場の確保、資金集め、シャトル等用具の調達・修理、先輩巡り等非常に多忙を極め、自分がラケットを振ったり運動靴をはいたりすることは全くなかった。先輩の永川・岡崎マネジャーも同様だった。加藤さんだけがマネジャーとして藤井光男先輩とダブルスを組んで、2度か3度公式試合に出場したことがあるよう記憶するが殆んどのマネジャーは試合などしたことがない。

第1回慶早定期戦に、はじめて選手としてラケットを握った磯見マネジャーは、試合終了後、感無量だったことを私に話した。

負けはしたが、彼も私も、おそらく他の選手諸君も、この1敗は気にならなかつたように思ったことだろう。あの負けるのが大嫌いな森友監督からも文句はつけられなかった。

昭和25年、慶応義塾体育会に正式加盟を許可されたが、その頃の当部の実力は正に日本一強かった。この辺のところは他の方の想い出話あるいは記録の項をご参照いただければお判りいただける。

何せ、塾の特徴として輸入スポーツの導入期は何でもものすごく強いのである。バドミントンも然りである。塾は斯界のリーダー格である。

その頃の学生バドミントン界は、関東4大学、すなわち明治・立教・法政・慶応の各大学対抗リーグ戦を中心に運営されていた。そしてこ

の柱をより太くしようと、東京大学と早稲田大学に働きかけ、加入を勧めたが、当時東大には正式なバドミントン部はなく、早稲田大学に加入して貰うようになった。当時早稲田大学はあまり強くなく、慶応と定期戦をやりながら技術を磨き、一日も早く4大学と肩を並べたいという願望もあり、トントン拍子に、慶早定期戦の話がまとまった。早稲田大学も昭和27年の7月頃、体育会に正式加入と聞いている。公式試合を増す頃合でもあった

当時早稲田大学にもインドネシアからの留学生でバドミントンの上手な選手が2・3人居たり、菊地選手を中心に結構強い人もいた。兎に角、両校の親睦を前提に、体力、技術の向上を目的とするも、特に塾としては、選手層が厚く、レギュラーの次に強い位の選手が多く、その啓発、即ち志気の向上と個人プレーの団体的役割という、特に精神面を強化するのに格好の舞台となっているはずである。

だからこの慶早定期戦は意義深いものであると思う。

もう1つ、他の試合では味わえない慶早戦のアフタープレー……

親睦会を楽しもうと、勝敗は別として、先輩・同輩・後輩と縦に横に斜めに美酒を飲み交わしつつ、指導されたり、したりおつき合いを深めているのも本定期戦の特徴の1つである。当夜の私達は両校の学生数名と、生気にも、神楽坂の“一体”という割烹で夜を徹して、酒と議論に花を咲かせた。その設営と主役は名マネジャー磯見君だったことも記憶に新しい。

本当にバドミントンをやっていて良かったな、慶早戦に出られて良かったな、いろんな先輩や、お友達を持つことができ幸せだな、楽しい思い出がいっぱいあって良かったな—こんなのが慶早定期戦の魅力である。



賑い終わって早稲田と共に

## 準備体操の制定

小宮 章敬 (昭和30年卒)

卒業してから、30年以上もたつと、余程強烈な印象を受けたことは、それがくだらない出来ごとでもはつきりと覚えているけれども、曖昧になってしまったことのほうが多い。準備体操のこともそのひとつなので、不正確なところはお許し願いたい。

私が入部した頃は錚々たる先輩が揃って我が部の全盛期だったが、部員の数も少なく、練習する体育館を確保することが困難な時代でもあったので、コートを入れておく時間があったいなくて、準備運動もそこそこに、コートに入って軽く打合いながら体を慣らして行くことが殆どだった。朝倉さんが主将になったころ、部員の数も増えて来て、部としても練習の規律を設定することが必要になり、そのひとつとして準備体操の型を作るようになって、どういうわけか私に、お前にか考えろと命令された。

デソワークのニールス・ブック体育大学に留学されて、帰国後いろいろな競技を伝えられた広田先生（広田先輩の父上）が横浜のYMCAの体育主事をされていたころ、私も会員としてバドミントン、スキー、キャンピング、クロケットなどと共にデソワーク体操の手ほどきを受けた。そのとき、下手な絵入りでメモしたことを思い出して本箱をひっつき廻して、そのメモを漸く見付けてホッとした。なんとかが形がついて、朝倉さんに報告し、早速やってみようと言うことになったが号令が上手にかけれられない。体操にかぎらず団体をまとめるには指揮者の能力がいる。体操もひとつひとつリズムが異なるしひとつの形から次に移るのに号令のかけかたがむづかしい、そのころ、新しく入部したもののなかに、顔や目玉も大きい態度も声もでっかい某君が目にと止って、お前号令をやってみろ、と責任を転嫁した。何時もの態度とちがって某君がテレながら、1、2、3、4、と声をかける、私が体操のやり方と、タイミングを示しながらなんとかひと通り終ったけれど、なんともしまらないこと夥しいものであった。それでも何日か辛抱強くつづけているうちになんとかみられる様になって、練習前の準備体操として認められることになった。今、どんな準備体操を取り入れているか知らないけれど、その時のひとつでも残っていれば懐かしいし又とても嬉しいのだけれど。

## トマス杯に出場して (対談)

第3回トマス杯出場選手 岡 道明 (昭和30年卒)

第4回トマス杯出場選手 越川 啓 (昭和33年卒)

岡 昭和29年私が大学4年のときに日本バドミントン協会が、はじめてトマス杯に出場することを決めました。当時日本へは海外の情報が入ってこないでトマス杯のこともよくわかりませんでした。トマスのデビスカップと同様に各国がゾーン別に對抗試合をやって各ゾー

ンを勝ち抜いた国がチャレンジ国を決め、前回の保持国と3年毎に対戦する仕組みで、日本はアジアゾーンに出場することになりました。

その年慶応は春秋の関東大学リーグ戦で優勝し、インカレでは立教に負けて第2位となり、慶応立教が2強といわれていた時代です。

代表選手の選考は全国の社会人と学生両方あわせて約20人が選抜されて2ブロックに分かれて総当りのシングルのリーグ戦をやり勝ち抜いた選手6人を代表にするというやり方で、結局、私と、立教の佐藤選手、望月選手、横浜国大の杉田選手、同志社大の上田選手、関西学院大学の武田選手が、代表となりました。暑い盛りによくぞ勝ち抜いたものだと今でも思います。

越川 あの時のリーグ戦は私が1年のときで見に行きましたが、壮絶だったですね。私の出場した第4回は、全日本選手権大会のシングルス上位4人とダブルスの優勝者が代表となり、リーグ戦はやりませんでした。

岡 当時の日本には日の丸を付けた飛行機はなかったので、中華航空CATのダゲラスDC4の4発プロペラ旅客機で、選手6人と角田団長、川口監督の一行8人は香港へわたりました。

越川 私達のときは、立教の佐藤さん片石さん永井さんと私の4人が選手で、川畑監督伊藤コーチの計6人で行きましたが、その時もまだプロペラ機のダゲラスDC7で香港経由セイロン(現スリランカ)のロンボへ行っただんですが、夜中に羽田を出て翌朝7時半頃香港に着き時間がかったのを記憶しています。今は3時間ぐらいですがね。

岡 香港では空港に着くと関係者が出迎えて呉れ、又領事館に招待されペラソダのバドミントンコートで腕を見せ日本食をごちそうになったりしました。現地に行っただけのことではシャトルコックは日本では鶏の羽根を使っていたんですが本番の試合では水鳥の羽のシャトルコックを使うということで急拠現地で水鳥の羽根のシャトルコックを調達して正式試合までの4日から5日間練習をやりました。もう1つびっくりしたことは日本ではラケットは木のフレームだったんですがスチールのラケットが使われていることを知り、あわててスチールラケットを買い求めました。

越川 僕らの時も同じでした。岡さんが行かれてから3年経っているんですがニュースとしてはスチールが使われていると聞いていたんですが、国内ではまだ販売されていませんでした。試合に行く前に各メーカーからサンプルとして開発中のものを貰ったんですがまだ完成されていないなかったんですね。使っているうちにラケットの先端が柄と離れ



で飛んだりするので僕たちも香港で買いました。我々は選手4人で申し合わせ小遣いとして1人日本円で8万円持っていくことにしたんです。当時1ドル400円ぐらいですから200ドルですが、香港の運動具屋で1人3本位ラケットを買ったので小遣いが半減し、そのラケットを持ってコロンポへ行ったわけです。

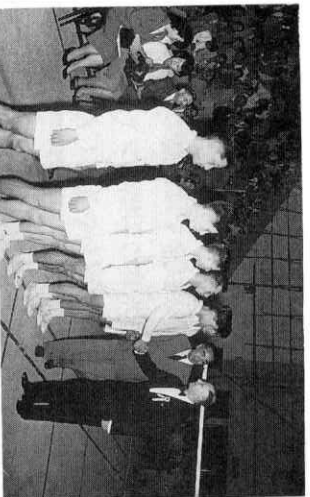
岡 水鳥のシャトルは重いので日本のガットではもたないと言うので現地でナイロンガットを張ってもらい会場で練習をしました。その会場はまわりの四方が観衆のスタンドで当時の日本の田園コロシラムみたいな構造のドームでコートは床はコンクリートだったので、びっくりしました。日本では床は木張りが常識でしたし、コンクリートで練習したら足がおかしくなっていました。公式の試合は2日間にわたって行なわれました。当日はすり鉢状の観客席が超満員になり、言葉はわからないんですが観客の応援がものすごくレフリーのコールも聞こえないくらいハイパーして圧倒されました。第1日目にはこの雰囲気を押され実力の半分も出せずに、シングルスは0-2、ダブルスは0-2、計0-4でやられてしまいました。私は佐藤選手と組んでダブルスに出場しかかなり好試合をしたんですが、負けました。翌日の2日目は試合場の雰囲気にも慣れてシングルス3-0、ダブルス0-2と善戦し、私はシングルスに出場し勝ったと記憶していますが、2日間の通算で3-6となり、日本初の、トマス杯出場は緒戦で負けということになりました。

その帰途、台湾に渡り軍の管制下にあった台北で親善試合をやりましたか待遇は最高待遇で試合にも勝ち素晴らしい思い出でした。

越川 僕たちは最初に香港で親善試合をやってからコロンポに行き、対セイロンの正式試合をやって、その後帰りにシンガポールで親善試合をやって1ヶ月くらいかかって帰って来ました。

岡 香港の親善試合では我々のかたきをとってくれたわけ？

越川 僕だけシングルスで負けましたがチームとしては7-1で勝ちました。その後コロンポでの公式試合に臨んだんですが、コロンポの会場は2階席のあるクラシックな会場で床は香港と同じようにコンクリートでした。対セイロンとの公式試合は、第1日目はシングルス3-0、ダブルス2-0、第2日目はシングルス2-0、ダブルス2-0、通算9-0で勝ちました。トマス杯で日本初



第3回トマス杯アジアゾーン対香港  
試合前の選手紹介

の1勝というわけです。その後シンガポールに寄り親善試合をやったんですがその時の印象が強烈でしたね。ちょうどその前年シンガポールの選手2人を招待し日本で親善試合をやりました。

その時バックハンドでスナツツだけでコーナーからコーナーへ打ち返す打ち方を見て、これは我々の世界にはなかつた打ち方なのでこれをやらなくてはいかんというわけですね。分練習をやり遠征に行きました。香港では3年前に負けた相手に7-1で勝ち、コロンボでもセイ



第4回トマス杯出場選手  
左端が越川選手

ロンに9-0で勝ち、日本もある程度のレベルのところまでいったかなと思います。前年に来日した選手とも再会し親善試合に臨んだんですよ。ところが5000人位の観客の熱狂的な応援もあり0-5と完全にやられてしまいましたものすごい差があり上には上があるなと思いました。技術的にすごい分違っていたことが1つと身体はさほど大きくはないうです。がものすごく上半身が発達していて体力の差があるんですよ。その証拠に試合が終って招待されて中華料理を食べに行つたんですが、加減して食べようと思つて食べてもお腹が一杯になつてしまい全部を食べ切れないんです。ところが相手の選手はバクバク最後の最後まで全部食べているんですね。これはすごいなと思いました。シンガポールにはバドミントンホールというのがあつて、ここでは試合はやりませんが見て来ました。スリ鉢状のコロシアムで観客席がまわり囲み中央にバドミントンコートが1面あるだけです。いいホールでしたね。

岡 マラヤはインドネシアと並んでバドミントンを国技とするところだから日本の国技館みたいなものだね。

越川 そうですね。シンガポールでの親善試合に負け鬼に角日本へ帰り実力をつけて次の試合に臨まなければということで東京へ帰つて来たわけです。次のトマス杯のゾーン予選の相手はタイでしたが、バンコックに行くための外貨割当がとれなくて、当時外貨事情が悪くスポーツ遠征の外貨は文部省の枠だったんですがそれがなくなつてしまいました。タイ国戦は日本は棄権せざるをえなかつたんです。その後第5回トマス杯に日本は出場せず6年後の第6回トマス杯のアメリカゾーンに宮永君が出場することになります。

岡 ところで遠征中の想い出は国際色豊かで食べるものもおいしいし大変楽しい海外遠征でした。試合が終つてから現地の協会のお招きの席で私が主将という立場上英語のスピーチをやらなければいけないこ

となり、英語は苦手ながら原稿を苦勞して書いてしゃべった記憶があるんですが果して通じたかどうか？最後のサンキューで拍手だけしてくれたんじゃないかと思うんですが、そういう思い出があります。越川 僕らの時も通訳なしかったですけど、最初に香港に着いた途端に1人づつパラバラにされて新聞記者に囲まれてしまい、何だかわからないことを聞かれようなるかと不安になったことを思い出します。それにしてもあの当時日本が貧しかった時代に、海外遠征のためいろいろとお骨折りにいただいた塾および日本協会の関係者の方々にあらためて御礼申し上げます。

## 学連務め

竹尾 敏廣 (昭和31年卒)

年史をつくる時は記録と記憶が入り交り、色々トエピソードが生じる。そしてそれが興味を惹く。だから、私は私なりに“ある疑い”の挿話—日本バドミントン界の不思議—をこの大切な紙面を借りて提言し、後日のために残しておきたい。

それは、昭和21年11月1日(金)から京都で第1回国民体育大会が開催された。この時に、日本協会を設立するために、関東側の「案」を携え西下し、関西側のたばねにご尽力されたのが広田兼敏先生である。が、実際問題として11月2日の時点で関東案は関西側と談義されるはずもないのに、公表昭和21年11月2日(土)を創立日とする日本バドミントン協会が誕生するのである。……………

広田先生は数多くの記述の中で、何故か創立の時を明言されていない。私は或る事柄を追って、国会図書館へも通い、過去の出来事を調べている内に得た資料から推測すると、S21・11・2という左、右いずれから読んでも同じになるゴロ合わせの日ではなく、実の設立の時は昭和21年11月30日(土)で、正式に諸書に纏めたのが昭和21年12月2日(月)ではなかったかという事実関係を確認し、以後この事をずうつとバドミントン関係者として思い続けている。なのに何故S21・11・2なのか、これが“ある疑い”の提言である。

翌昭和22年10月4日に関東学生バドミントン連盟が設立され(因みに全日本学生連盟の設立はS25・11・23である)、この設立にご蔭心されて初代委員長に就かれたのが六角勉先輩である。

私は当学連第6代委員長三枝欣一先輩の薫陶を受け昭和29年度に委

員となり、昭和30年度関東学連の第8代委員長を担当した。

私の在学期間（S27・4～S31・3）当時は我が塾は黄金時代の真ただ中であった。斯界全体の動きではという事になれば、S27年が日本協会がIBF（国際バドミントン連盟）への加盟を承認された年であり、何と第1回全日本実業団選手権が開催された年である。S28年は私が、3学年、4学年の間毎日のように通い詰めた御茶の水の岸記念体育館に日本協会が東京YMCAから移った年（同時に関東学連もここに移り間借りすることになったわけである）。S29年は日本で初めての海外試合となったトマス杯（第3回）アジア地区予選に初参加する……といった年代である。

競技界はというと、全日本と名のつく選手権大会は国体を別にして、オールジャパン、インカレ、インターハイと全日本実業団選手権大会しかなかったのであるから、勢い、大学（学生）中心のそれであり、その先頭にあった我が塾は即ち斯界の牽引的存在であった。換言すれば、日本のバドミントン界を背負って立つ、そういう環境におかれていると、選手でもない私でも、やはり、「私は今、日本のバドミントンを動かしている」という実感を持って行動していたような気がする。私が学連の委員長にあっても、ただ単に何時何処で選手権を、或いはリーグ戦を行うかではなく、何を如何になす事が必要かを考えた。大きくは世界との交流はできないものかとか、全国での活発化の方法は何かとかで広報活動に一生懸命だったことが思い出される。

意気軒高と協会の角田理事長を始め、理事さん（大学のOBが殆んどであったが）と接触を保ち、又スポーツ紙の記者さん、業界の社長さん、或いはプロック学連の委員長等々と交流を計り、バドミントンを熱く語った事がとても懐かしい。就中、当時発行されたばかりの斯界専門誌“バドミントン新聞”には大学、学生のリーグ戦、選手権はもとよりオールジャパンに至るまで、その展望（予想）・戦評を大々的に掲載して貰い「知らしめる、広める、深める」事に全精力を傾注した。今でいうスポーツ評論家それとも一端の記者気取りで原稿を書き、取材もし、原稿を送った自分のアルバムなどをあらためて見ると誠に赤面の至りではある。またその反面、予想等を書く上で、他の多くの学校の有力選手に直接取材もし、お蔭で多数の選手と兄弟のように仲良くおつき合ひする様になった事も忘れられない思い出である。

ふり返って、わが国にバドミントン競技が生まれ、その指導、普及、発展の過程の中で、少なくともわが諸先輩の方々が、その節目、その

時々常に中心的役割を果たされ、ご活動されていた事を思い、この「先取の精神」の継続こそ、わか塾の伝統の継承に他ならぬと、私も思ってしまったのであるが、最近、この精神は保たれているのだろうか、いさか気がかりではある。

この50周年記念誌が刊行される平成4年はバドミントンが5輪開催年である。バドミントンが5輪の正式種目競技として、初めて行なわれる誠に意義深い年である。この時こそ、わか塾の伝統が「光」を放つ絶好の時だと考えるのはわたしひとりではないだろうと思う次第である。

## 我等は大量入部の新入部員

鈴木 嘉明 (昭和32年卒)

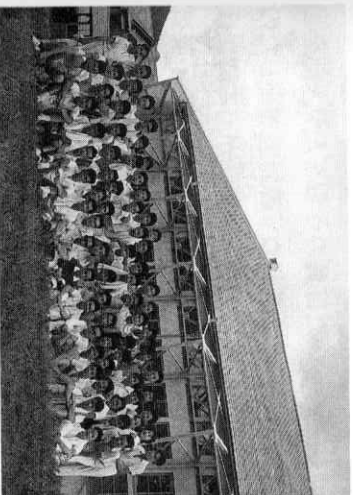
1953年 (昭和28年) 4月、私達は慶応義塾大学に入学が決定し、帽子や学生服のボタンを大学生用のものにつけ替えて、いよいよ大学生になったのだという気持ちで日吉の校舎へ通学し始めた。高校生活をふり返って3年間何をして来たのかなと思つた時、何となく勉強し、何となく遊んで過ごしてきたような気持ちであった。と云うのも激烈な入学試験競争を経験しなかつた為かも知れなかつた。大学では何か足跡を残しておきたいと考えた時に、体育会生活を選んだのも、中学時代に野球に明け、野球に暮れていたことを思い出し、身体を鍛えることは勿論であるが、もつと素晴らしい大学生生活が経験できるのではなにかということにあった。

このような気持ちを持った仲間が集まつたのかどうかは各人に確認していないので明確ではないが、「何かを体験したい」又は「楽しい友人を作りたい」と思つたに違いない。ともかく掲示板上に貼つてあつた「バドミントン部新入部員募集」を見て、説明会に出席した時、20人以上の新入生がいたと記憶している。勿論この20人以上の新入生が多いのか少ないのかとか上手な人がどの位いるのかなどは、意識していなかったし、バドミントン部がどの程度活躍している部なのかということなども知らずに説明会に出席したのは、私だけではなかつたと思う。後になって知つたことではあるが、体育会に入部した者は体育実技が免除になるという特典があつたとかで、1年間は体育会に籍をおこうという者もいたらしい。無事に資格審査(厳密なものであつたかどうかは不明)にパスして、天現寺の幼稚舎の体育館に練習用の道具を持つて集合した同期生が20人揃つていたことは、はっきり記憶している。

というのは、当時の2年生以上の先輩を全部合せても私達新入部員より少なかったからである。練習コートは2面だけで、常時コートに入ってプレイできるのは8人までなのであるから、20人の新入部員はどれほど大量の人数であったのか想像に難くなかったわけである。当時の朝倉キャプテン、磯見マネジャー、内田先輩、三枝先輩など最上級生の皆さんにとって新入部員の取扱いについてご苦労されたことと思う。更に私達同期生の中に女性部員が1人いたことも特筆すべき事柄であろう。というのは先輩女子部員が皆無であったから初めての女子だったことである。前述の20人の新入部員の取扱いは、コートに入って実技練習をするレギュラー以外の先輩が少なかったもので、新入部員担当の上級生は、夕方4時の練習開始から日暮れまでの約2時間以上を柔軟体操とランニングに費やし、更にコートに入れば満足にシャトルコックを打てない素人を相手にハイクリターの基本動作を交替で指導して下さったが、相手の方が多数人数なので、ご苦労も多かったことと思う。特にランニングは狭いグラウンドを何周もするのでは倦きるだろうとの配慮からか校外へ出て、一般道路に入り広尾の交差点を右折し、有栖川記念公園を右に見て坂を登り六本木へ出て、左折して六本木通りの坂を下り、霞町交差点（現在の西麻布）を左折、日赤病院、聖心女子大を右に見て天現寺へ戻るコースを連日走った。交通量の少ない当時だからこそ走れたのだろうと思うが、普段走り慣れないものにとってはとても厳しいランニングであった。又コートに入って練習するのも人数に限られるので、1日30分コートに入れば恵まれていゝる方であったように記憶している。これは練習のほんの一例であるが、ハングリーな環境の中で、熱心に指導された先輩の情熱や、早く1人前のプレイヤーに成長しようという私達の意欲がまとまって、強固なチームワークが形成されたのではないかと思う。この証拠に、大学4年間無事にバドミントン部の生活を経て卒業した同期生が12名記録されている事実となっている。

私達の卒業後は昭和38年の卒業生が14名名簿に残っているだけで、これだけ多くの同期生を有している年度はないことをもってしても、50周年を迎えようとしているバドミントン部にとっては、エポックになっていることは間違いないと自負している。

慶応義塾体育会バドミントン部 万歳！！



浅間温泉の夏期合宿は大世帯

## 女子部の創部

片石 (佐藤) 千鶴子 (昭和33年卒)

1953年4月大学に初めて女子部員が誕生しました。1名の部員ではありましたが、学連も女子部門としての活動は少ない状態でした。女子部員入部を語る以前に女子高創部があり、その卒業生が入部という段階になっていくので、その動機を少々思い出し試みてみたいと思います。

当時女子高は創立3年目で、運動部なるものはテニス、バスケット等の数部きりありませんでした。そのうえ練習会場はすべて中等部の施設を借りていたので、思う様な活動は出来ませんでした。私はテニス部にいたのですが、1面のコートに約50人の部員数という状態だったので、なかなかプレーするには至りませんでした。そんな時近所の友人の家で、庭にネットを張ってバドミントンを初めてやったところその面白さに、何とか自分達の学校にも部を作りたいと思いい数人の部員によびかけ、どのようにしたらばよいのかを担当であった近藤先生に相談をしたところ、中等部で教鞭をとっていらつしやつた兵藤先生を御紹介下さり、先生から大学の部の様子をお聞きしたところ、リーグ戦を観戦させて戴いたり、練習風景を幼稚舎の体育館へ見学させて戴き、より一層バドミントンに興味を持ち、体育会本部へも行って大学各部と女子高運動部との関連やら何やらとご指導下さり、2年生であった我々の学年が中心となって1952年9月に創部したのでした。3年生は3名でしたが、進学と同時に入部したのは故人となられた有山さん1名のみでした。その時が女子部創部となったのですが、初の女子部員としての練習参加をどの様にしたらばよいか部として戸惑った様でした。実際には秋頃より練習を開始し、同時に高3であった私達とも一緒に幼稚舎の体育館で練習をしたものでした。そして私達女子高の2期生が卒業すると20人近くもいた部員のうち5人が入部をした1954年春、合宿前の陸トレで女子部員として初めて練習参加をしたのでした。がその時のロードワークの辛かったことは昔話が出る時にはかならず話題にあがります。それは日吉から多摩川までを、男子部員を先頭に高校、女子、最後尾には徳用マネジャーが走り、途中落伍する者のないように(歩きながらでも)走らされました。女子は元住吉で復路につくのですが、登り坂が続き日吉駅前から校内に入ってから最後の坂を走る事の苦しかった事、ポストにたどりつくのが大変でした。今でもそのポストを見るたびに当時の事が思い出されます。走る事の



1954 (S29) 10月30日  
慶応女子インカレ初参加  
準決勝にて郡山短大に敗れる

嫌いな私はいつも明日はなんとか理由をつけて休んでしまおうかと思いつながら帰宅するのですが、翌日になるとやはり規則通りに参加し最終日迄欠席なくして終ってしまうのでした。4月になると外部より門倉さんが入部し、有山、木本、久野、佐藤、高橋、藤林、総勢7名となり、初試合は関東学生選手権でしたがその時の戦績は憶えていません。そして秋の慶早戦終了と共に第1回関東大学女子リーグ戦が開始され、次に京都でインカレ初参加、結果はベスト4でしたが学連全体として女子はまだまだ参加校が少ない時代でした。1955年には有山さんが退部し私達5名の2年生のみとなり各人が試合を控えて、怪我や病気にならない様健康に留意しつつ練習をしたものでした。

そして北海道のインカレ行を費用が高む為に女子の補助は出来ないという事で許可されず、悲しい思いをしたことは忘れられないひとつでもあります。他の理由としてはポイントゲッターであった高橋の不参加ということで戦力低下は許せないという事もあったのでした。が悲しさと同様さのあまり夏休み中にもかかわらず練習日がとれた日は1日も休まず全員で参加したのでした。そしてその結果は翌年のリーグ戦優勝、インカレ2位、東西対抗連続出場という成績結果となった出発点でもあったのでした。苦あれば楽ありの諺どおり、となったのでした。

それ以前に1956年、岡本、成願、平岡、藤井等7名の新入部員、翌年には中村、隅田をはじめ多数の入部があり女子も大世帯となったのでした。

今振り返ってみると、男女共に華やかであった時代に在籍し、苦しくも楽しかった部生活を送る事が出来たのはこのうえもなく幸せであったと感謝する次第です。

部の50年の歴史には輝かしい栄光の時もあれば衰退の時もあり、その時代時代に残されてきたものは戦績にばかりあるのではなく、先輩後輩でつながれて来た貴重なものが多々ある事と思います。これから先も部発展の為に、全員で協力し、わか擾応バドミントン部ここにありと誇る事の出来る様努力して行くのではありませんか！

創部以来部を支える為に努力して来て下さった皆様に心より感謝をいたします。

(なお女性性は旧姓を使用させて頂きました。)

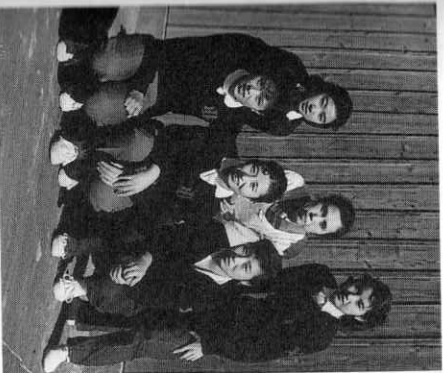


## 女子部花開く

牧 (藤林) 洋子 (昭和33年卒)

55年秋リーグ戦には夏の猛練習の成果はまだあらわれず、2位に終わった。プロگرامムに女子選手名簿もなく、関東学連常任委員に久野正恵の名がある。56年3月、有山文子が入部し、久野は退学して東京女子医大へ転学したが、女子高から藤井道子、岡本佳子、平岡洋子、成願恵子、岩田菊子、石田智子、宮原千嘉子が入部して、10名になった。吉田格磨コーチの指導下、春リーグ戦は3位に甘んじたが、関東選手権では高橋が単2位、佐藤は単4位、複2位は佐藤高橋組と上位を得た。夏の浅間合宿では2会場あって、たっぷりとコートに恵まれ、吉田コーチ始め石田主将ら男子レギュラー、下級生等を、休むひまを惜しんで相手にして、日頃、練習場を求めて右往左往するうさを充分に晴らした。かなりきつい合宿だったが、秋リーグ戦では佐藤高橋組を中心によくまとまり、念願叶って優勝した。秋晴れの午後、優勝盾と賞状を大事にかかえ、女子レギュラーは吉田コーチらと共に塾監局で、全日本学生バドミントン連盟会長だった奥井復太郎塾長に報告した。元部長の先生は、女子部発足当初から大変目をかけて下さっていたから、とてもよろこばれた。好調で東京のインカレに出場したが、女子の実力は西高東低とあって、優勝した京都女子大に敗退し、上位進出できなかった。しかし個人戦で高橋が頑張りをみせ、単10位に、複12位に佐藤高橋組がランクされ、両名は57年1月、東西対抗(東京)に出場した。春合宿は前年と同じ久里浜。天井が高いのはよいが卓球の合宿とかちあいい、独特な音が耳につくやら、ボールがとびこむやらで閉口した。岩田、石田、宮原が入部したもの、女子高から中村重子、隅田恭子が入部し、9人で春リーグ戦をむかえた。今季は2位に終わったが、関東選手権では高橋が単優勝をなすとげ、3位佐藤、複も佐藤高橋組が2位になり、大よろこびの女子は内輪でお祝いをした。

夏、浅間温泉千代の湯は4年生には3度目の場所。或晩、女子一同はコーヒーをのみにゆき、吹野監督はじめOB諸兄も同じ店にいたので安心し、門限間際とみて宿舍へ帰った。しかし、店の時計が遅れていた様で門限破りとみなされ、翌日の練習後、罰として余分にランニングや馬とびを命じられた。もう出ない声と体力をかきあつめ、互いにはげましあいながら何とかやりとおせた。OGが顔を合せるというも話に出る事件である。



第8回全日本学生選手権2位となった女子チームと原岡夫人

秋リーグ戦はまた2位に終り、4年生は学生時代最後の公式戦になるインカレ(高松)出場を強く願った。当時の部の財政事情もあってか、色よい返答はない。思い余って佐藤、高橋、藤林は関東学連常任委員の間々田篤と共に築地の名糖に吉田元コーチをたづねて相談し、更に吹野監督の勤務先、八重洲口近くの守谷商会へおしかけ、涙を流して直訴した。ようやく自費参加ならよろしいとなって、佐藤、高橋(佐藤家と吉田が折半負担)藤林、藤井、岡本、平岡の6名が登録された。岡本は家事の都合で参加できず、5名は男子や他の関東勢と夜行で出発した。高松の三栄荘は塾員原岡謹一氏が経営され、同氏、夫人、従業員あげて、大変親身に世話をし下さった(同氏は後年、藤林の義父学生時代の親友と判明)。

高松三田会の昼食会に招かれたのもうれしかった。団体の1回戦は5-0と大勝したが、同志社女子大に3-2、日体大に3-2と接戦が続く。決勝相手は前年くやし涙をのまされた京都女子大。男子も決勝で立教と対戦し、同時刻にコート1面をへだてて試合が進行し、応援は兵藤先生と間々田の2名。劣勢といわれながら2-2にもちこみ、第3単も1-1まで粘ったが力が及ばず2位になった。続く個人戦も善戦し、高橋が単5位、複6位に、佐藤は単16位、複6位にランクされた。12月下旬、東西対抗(京都)に2年連続出場して、有終の美を飾った。ここまで、女子の処遇に苦心しながら、力になられた先輩後輩諸氏に、心から御礼申し上げます。皆様の目に見えぬ支持あればこそ、好成績を納められたことをあらためて思うと共に、今後、男女を問わず、部の発展を願っている。